

I 次の傍線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に改めなさい。

- ① 堅実な考え。
- ② 朝から悪寒がする。
- ③ 候補者を担ぐ。
- ④ ゲンソウ的な景色。
- ⑤ ケンブンを広める。
- ⑥ 寝てもサめても忘れられない。

II 次の慣用語の()の中に漢字一字を入れて完成させなさい。

- 1 () に衣着せぬ
- 2 () り目にたたり目
- 3 () 子にも衣装
- 4 () 後のたけのこ

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。登場人物は大学生で、晴子と晴希は姉弟、一馬は晴希の友人です。

「それより、女子優勝ってマジやばくね」

「それより無敵だよあの女子たち、と、本人たちに聞かれたら投げ飛ばされそうなことを一馬は言う。

「男子も続かねえとなあ」

一馬が真上に放った声は、夏の夜に散っていく。晴希は、武道館の中心を貫くように立っていた姉の姿を思い出した。

「……俺さー」

「ん」

「なんでこんな柔道一家に生まれたんだろうなー」

「はー?」

一馬の声がやさしくなる。晴希はそれだけで少し、心の近くを引つかかれたような気持ちになる。

「俺、道場の子に生まれたから柔道始めただけなんじゃないかな。ピアノ教室の子に生まれてたら、ピアノやってたんじゃねえかな」

頭の後ろで手を組もうとして、晴希は顔をしかめた。右肩から右背中にかけて、鈍い痛みが駆け抜ける。

カズの顔を見ると、話せなくなりそうだ。今までの十年間が照れくささになって、言葉を邪魔してしまっそうだ。晴希は、ほんのりとまだ痛みを残す肩をてのひらで撫でながら、真上を向いたままだった。そして、ほとんど乾いてしまった髪の毛に絡まるなまぬるい湿気を感じながら、話し始めた。

「俺さ……肩ケガして柔道できなくなったとき、ほんとほッとしたんだよね」

声は空気に溶けて、その分夜が深くなる。何だよ急に、と、カズが隣でたじろいだのがわかった。

「俺わかってんだ。俺は姉ちゃんみたいに強くなれないってこととか、本当はスポーツ推薦だつて断るべきだったとか、そういう、俺の感覚だけがわかることってあるだろ」

「ハル」

センチメンタルモードっすか？ と茶化してくる一馬を無視して続ける。

「だからさ、春に練習試合で肩ケガしたとき、すげえ、すーげえ痛かったんだけど、なんかわかってたっつうか、安心したっつうか……ホッとしちゃったんだよな」

晴希は、頭の下にしいてあったタオルを抜き取って、顔の上にかけた。熱を持ってきた視界が、今度は真っ白になる。

「このケガだつてずっと治らないわけじゃないんだけどさ……こうやって、見る側っつうか、応援する側になってみて、やつぱわかった」

ハル、ともう一度、一馬が言った。さっきの声とは温度が違うことはすぐにわかった。だけど、カチカチに固まっていた心からやっと溶け出した言葉は、^②簡単には止まらない。

「俺、姉ちゃんみたいにかっこよくなれねえや」

不意に、一馬が顔の上のタオルを取った。危なかった。そうでもしてくれないと、本当にこのままセンチメンタルモードに入りこんでいってしまうところだった。

コンクリートが冷たくて気持ちがいい。夏の夜は、自転車のベルも、点いたり消えたりしている街灯も、車のエンジン音も、照れくさい話も、全てを美しく包んでくれる。

「あのなあ」

^③一馬が話しだしても、晴希は真上を向いたままだった。

「柔道をしてるとき、ハルだつてかっこいいんだよ」

車道を駆け抜けていく車のタイヤと道路のこすれる音が、不規則な間隔をあけて聞こえてくる。

「ハルは気づいてないかもしれないけどさ」

一馬は、残り少なくなったミネラルウォーターのペットボトルを宙に投げると、器用に片手でキャッチした。水が、夜の光を受けて自由^④に波打つ。

「ハルは相手を投げるとき、自分が投げられてるような顔するんだ。相手を倒すときも、自分が倒されるときみたいに辛^⑤そうな顔してん

だよな」

一馬はもう一度ペットボトルを宙に投げた。闇の中でも水は光る。

「お前の柔道は、そういうとこがかっこよかつたんだよ」

一馬はそう言うと、勝手にミネラルウォーターを全部飲みほした。それ一応、俺のなんだけどな、と晴希は思ったが真上を向いたままだった。

そういうとこって、どういうとこだろう。わかったようなわからないような、でもきつとちゃんと確かめないほうがいいような、そんな気持ちがあった。

〔中略〕

自分の家が命志院大学の公式の練習道場であることは、中学生のころにはつきりと理解した。二人をチビとか坊主とか呼んで構ってられるガタイのいい人たちは、皆、命志院の柔道部員だった。大きな学ラン^⑥をもてあましている晴希たちの姿を見て、「お前らもいつか、俺らの後輩になるんかな」「私それまで女子柔道部にいたいな」なんて言う人たちもいた。

「姉ちゃんと一緒にセンスがあるな」と言われていたのはせいぜい小学校を卒業するまでだった。晴希はそのことにうすうす気づいていながら、自分は坂東道場の長男であるという盾^⑦で自分のことを守り続けていた。

高校生になると、その盾がなければまっすぐ前を向いて歩けなかった。だけど本当は、^⑧その盾があつたがために、自分一人では歩けなくなっていたのかもしれない。

高校二年生の時、一馬はついにインターハイ^⑨出場を決めた。同時に、晴子は三年連続のインターハイ出場を決め、坂東道場は浮き足立っていた。

晴希はどんな試合でも見に行つた。自分が出られない試合でも、晴子や一馬や、部活仲間が出るならば見に行つて応援した。どうしてだろう、あの白い柔道着を身にまとつた瞬間、晴子だけでなく、皆が剣をも投げ捨てた勇者に見えるのだ。晴希はいつも、そんな仲間たちの姿を後ろから見つめ、応援していた。

晴子は、最後のインターハイで準優勝を飾った。一馬は二回戦敗退だったが、インターハイに出られたというだけでもすごい。晴希はそのとき応援席にいて、二人の後ろ姿を見ながら立ち上がって拍手をしていた。

自分の中で何かが崩れていく音をかき消すように、てのひらが真っ赤になるまで拍手をし続けた。

晴子は申し分のない実績でスポーツ推薦枠を勝ち取り、当然のように命志院に入学した。一馬はスポーツ推薦をもらっていたのにそれを断って一般受験をした。そして、新入生の中で成績上位〇・五パーセントに入り、特待生として授業料を免除してもらっている。

俺が命志院のスポーツ推薦をもらえたのは、本当に、純粋に、実力があつたからなのだろうか。そんな、腐って糸を引くような思いは、常に晴希の心を縛り上げていた。

「晴希！」

全身を貫いた痛みよりも、晴子の声の方が体によく響いた。

今年の春、命志院に入つてすぐの練習試合。対戦相手に仰向けに投げられたとき、光を放つ稲妻のような痛みが全身を駆け抜け、腐った自分自身が頭のとっぺんから引き裂かれたように感じた。相手の払い巻き込みを避けきれず背中が畳に叩きつけられたとき、対戦相手は晴希の右肩の上に乗ったままだった。

あのときは一馬がすぐに応急処置をしてくれて、そのまま病院に連れて行かれたけれど、痛みのせいで夜は満足に眠れないくらいだった。心臓が脈を打つたびにどくどくと痛んだ感覚は今でもよく覚えている。

そしてその夜、心の底からため息をついたことも、よく覚えている。諦めと安堵が混ざり合つてこぼれたため息は、肩を抱えていた左手の甲に降りかかって、とてもあたたかかった。

「そんなに落ち込んだつてしょうがないだから」肩に包帯を巻いた晴希に、晴子はそう言った。次はケガしないように気をつけるしかないんだから。何度も何度も、晴希はそう言ってくれた。

「そんな落ち込んだつてしょうがないじゃん」
バスの前方から、女大将であるザキさんのハリのある声が飛んできて、晴希はハッと目が覚めた。武道館から道場へ帰るバスの中は、

晴希以外にもまどろんでいる部員が数人いた。

「しょうがないよ。」

A

ザキさんは言葉を選ばない。主将がガックリと

B

様子が目に浮かぶ。

全日本学生柔道優勝大会の二日目、男子七人制は二回戦負けだった。つまり、今日は一回も勝てなかった。帰りのバスの中の空気は、行きとは正反対に重く沈んでいた。

「女子は優勝したつてのに……情けねえ」

「大丈夫、あんたはけつこういつだつて情けないから」

昨日だつてカツカレー食べ切れなかったし！ガハハと笑うザキさんにつられて、晴希も一馬も笑つてしまう。デリカシーがないと見せかけて、ザキさんが一番空気を読んでいるのかもしれない。

「今日も俺、立ち上がったつて？」と隣に座る一馬に訊くと、「もち。もう途中から放つといた」と笑われる。どうりで視界が良好だったわけだ。

「お前の後ろザキさんでき、あの人、がんばれ！の間に、座れ、座れええー！つて叫んでたからな」

晴希はいつだつて、試合が終わつたあとに喉がひりひりと痛んでいることに気がつく。

(朝井リョウ『チア男子II』による)

(注) 1 スポーツ推薦……入試の方法の一つ。スポーツの技能によって優先的に入学できる。

2 ガタイ……体格。

3 学ラン……男子の学生服。

4 インターハイ……高校生のスポーツの全国大会(全国高等学校総合体育大会)。

問一 傍線部①「心の近くを引つかかれたような気持ち」の説明として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 他人のことを素直に喜べない嫌な自分を感じていたが、優しくされると余計にその感じが強まるような気持ち。
- イ 体の痛みを抱えているために心もくじけたままで、周囲の盛り上がりとは反対の方向に押されるような気持ち。
- ウ 思っていることを口にしたが、はぐらかされるなら話さなければよかったと、後悔がわいてきたような気持ち。
- エ 少しのことにも感じやすくなり、あふれ出しそうになっていた心に、そのきっかけが与えられたような気持ち。

問二 傍線部②「簡単には止まらない」の理由として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 言いにくいことを思い切って話したところ、相手が返事に困っているのに気づき、どのようにまとめたらよいか分からなくなったから。
- イ 長い間言葉にして吐き出すことができなかった気持ちだが、いったん話し出してみると、最後まで言わずにはいられなくなったから。
- ウ 友人に対するわだかまりがなくなったとたん、話したかった正直な気持ちが次から次へとあふれ出て、引込みがつかなくなったから。
- エ 試合のケガをきっかけに、今まで全く気づかなかった本当の友情に出会い、それを誰かに聞いてもらいたくてたまらなくなったから。

問三 傍線部③「柔道をしてるとき、ハルだってかっこいいんだよ」とありますが、一馬が考える、晴希の柔道のかっこうのいいところは、どういうところですか。自分の言葉で、解答欄の「ところ」につながるように二十字以内で答えなさい。

問四 傍線部④「その盾があつたがために、自分一人では歩けなくなっていたのかもしれない」の説明として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 大きくなるにつれセンスがあるとされなくなったうえに、道場の跡継ぎとして期待されるようになり、その重さに耐えられなくなったということ。
- イ たとえセンスが無くても、道場を継ごうという責任感を持つてはいたが、そのために本当にしたいことを自然と我慢していたということ。
- ウ 幼い頃センスがあるとと言われて道場を継ぐ気になってからは、おだてられていたと分かってからも、その気持ちを消すことはできなかったということ。
- エ センスが無いのを、自分が道場の跡継ぎだというプライドを持つことで補ってきたが、むしろそのために自立できなくなっていたということ。

問五 傍線部⑤「諦めと安堵が混ざり合ってこぼれたため息」の説明として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア いつかケガをするのではないかとこの恐怖心を持ち続けていたが、ついにケガをしたことで緊張の糸が切れ、逆に安心して出たため息。
- イ 大会に出ても勝つことができないので、客席で他の選手の応援をしている方が気楽でいいと、ケガをしたことにほっとして出たため息。
- ウ 自分には柔道の力が無いことにうすうす気がついてはいたが、ケガをしたことで柔道へのこだわりから解放され、ほっとして出たため息。
- エ 大学に入って間もなくケガをしたので、この機会を利用して今までの悪いところを全て治す時間をとろうと思い、安心して出たため息。

問六 空欄 A に入る言葉として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 次は優勝するよねー
- イ 実力差があつたもん
- ウ ケガ人ばかりじゃ
- エ そもそも出るなつて

問七 空欄 B に入る言葉として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 眉をひそめている
- イ 肩を落としている
- ウ 舌打ちをしている
- エ 首をひねっている

問八 本文は三つの場面に分けることができます。一つ目は〔中略〕の前までですが、二つ目はどこまでになるでしょうか。最後の十字を抜き出して答えなさい。(句読点は含みません。)

問九 本文の表現の説明として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 仲間同士の会話は、若者らしい明るい口調を使っているが、「苦しい」「つらい」などを多く使うことによって、内面の孤独な気持ちも描いている。
- イ 一馬の目を通して、裏方として活躍する晴希の様子が語られ、常に選手の後ろ姿を見つめながら応援しているその様子によって、大会の熱気を表現している。
- ウ 夏の夜、屋外で話している晴希と一馬の様子は、温度や闇・光に関する表現と共に描かれ、二人だけのひそかな話に合った背景が作り出されている。
- エ 柔道の話が多いところでは、「盾」「剣」「縛る」「引き裂く」などの表現や、具体的な数字によって、柔道のきびしい上下関係が伝わるようになっていく。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日々をいろいろ季節や風景、住まいや家並み、人びとの姿や道具。どちらをむいても、私たちの日々をとりまく環境は、どんどん変わってききました。これからも変わりつづけるにちがいません。変化や新しさは、時代の表情を変える力をもっています。

けれども、そう言えるのは、目に見えるものについてです。モノの変化、かたちの変化、暮らしの変化、暮らし方の変化といった目に見える変化が、わたしたちにもたらすもつとも大きな変化は、実は、目に見えないものの変化ではないか、と思います。

目に **A** ものの変化というのは、すなわち言葉の変化です。言葉の変化というと、流行語や若者言葉の変化と考えられがちですが、そうではなく、言葉ほど、目に **A** ものの変化を反映しているものはないのです。

ごく普通の何でもないような言葉に見える。しかし、その言葉によって、自分が生かされていると感じている言葉と異なるところがあります。たとえば、「梢」という言葉です。木の枝の先を言う言葉です。「梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここや杉の幹へ、蠟燭で照らしたやうな弱い日なたを作つてゐた。歩いてゆく私の頭の影や肩先の影がそんななかへ現はれては消えた。なかには『まさかこれまでが』と思ふほど淡いのが草などに染まつてゐた。試しに杖をあげて見ると、ささくれまでがはつきりと写つた」。梶井基次郎の「笈の話」という文章です。（『梶井基次郎全集』第一巻による）

こういうふうな梢という言葉が、私たちの見ている風景のなかに、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということをお考えののです。ふだんわたしたちは木を見上げるということをしなくなっています。文章の題の「笈」も、水を引く樋をさす言葉ですが、いまは普段に見るものではなく、その言葉が表していた趣というものは、わたしたちの語彙には **B** ありません。

あるいは「しげしげ」という言葉。

*「寝床から抜け出し縁側に出る。煙草に火をつけ、うらうらとした陽ざしの中へゆつくりと煙を上げる。激しい勢で若葉を吹き出している庭前の木や草を、しげしげと眺める。『俺は、今生きて、ここに、こうしている』こういう思いが、これ以上を求め得ぬ幸福感となつて胸をしめつけるのだ。心につながるもの、目につながるもの一切が、しめやかな、しかし断ちがたい愛惜の対象となるのもこういう時だ」。これは、尾崎一雄「美しい墓地からの眺め」の一節（岩波文庫ほか）。

「しげしげと眺める」というしんとした動作から、「心につながるもの、目につながるもの」への愛惜が生まれてくる秘密が、ここにはさりげなく語られています。こういうふうな「しげしげ」という動作を表す言葉が、今日なくてはならぬ言葉、心の風景をつくる言葉としてあるだろうかということをお考えの。私たちは今日ますますスピードをあげて生きることに追われて、「しげしげと目の前の風景を眺める」習慣をなくしてはいないでしょうか。そして、そのために「**C**」もなくしてはいないでしょうか。

もう一つ、「本」という言葉。

② 本という言葉は、いまでももちろん日々親しい言葉です。

D、本という言葉が喚起する次のような感情は、いまはもう私

たちに日々親しいものではなくてきています。「その頃の本は読むものだった。古本屋にはいい本が置いてあってそれを漁って歩くのが楽しみだった。③ 一体に本にはその匂いというものがあって本が選りすぐられたものであるに従って本の匂いそこに漂う。その中から一冊を手に入れるのはその匂いを持って帰るようなものだった」。これは、吉田健一「東京の昔」の一節（中公文庫）。

活字という文字には匂いがあった。新聞には新聞の言葉の匂い、辞書には辞書の活字の匂いがありました。言葉は意味だけでできていたのではなくて、文字には墨の匂い、インクの匂い、紙の手触り、風合いがありました。本を手にする、本を読むことは、そういう感覚を覚えるということであつたけれども、そういうふうな「本」という言葉も今日では、もうなくてはならぬ言葉、心の風景を作る言葉として、ある親身な感覚を喚起する言葉というふうではなくなっています。

本来、そのまわりにさまざまなものを集めるのが、言葉の本質です。風景を集める。感情を集める。時間を集める。④ ヴィジョンを集める。人を集める。記憶を集める。そういう言葉を自分のなかにどれだけもっているかが、胸のひろさ、心のゆたかさを決める。

⑤ こんなふうに、語彙の行く末をたずねてゆくと、そこに見えてくるのは、わたしたちの日々の心の風景です。いまは言葉が使いついていないか、どうか。

⑥ モノは豊富になつたけれども、逆に語彙が乏しくなつた。そのために、さまざまな言葉によってわたしたちがずっと得てきた心のひろがりや陰影やゆたかさ、奥行きが削られて、わたしたちの日々のあり方が狭く窮屈なものになつてしまつていくとすれば、問題です。

言葉むなしければ、人はむなし。語彙というのは、心という財布に、自分が使える言葉をどれだけゆたかにもっているかということ

です。その言葉によって、いま、ここに在ることが生き生きと感じられてくる。そういう言葉を、どれだけもっているか。いまは、言葉のあり方というのが、あらためてそれぞれの日常に、切実に問われているときのように思われます。

(長田弘『なつかしい時間』による)

〈注〉1 語彙……………ある人の用いる言語の全体。

2 喚起……………呼び起こすこと。

3 ヴイジョン……………理想として描く構想。未来像。

問一 空欄 **A** に入る最も適当な言葉を本文中から探し、四字以内で抜き出して答えなさい。

問二 傍線部①「そんな」が指し示している部分はどこですか。本文中から探し、五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 空欄 **B** に入る言葉として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

ア 以前から イ まだ ウ 今後も エ すでに

問四 空欄 **C** に入る最も適当な言葉を、*「寢床から……………こういう時だ」の部分から探し、抜き出して答えなさい。

問五 i 傍線部②「本という言葉」には、「梢」や「しげしげと」という言葉との違いがあります。その違いを本文の言葉を使って十字から十五字で説明しなさい。

ii また、傍線部②「本という言葉」には、「梢」や「しげしげと」という言葉と共通点があります。その共通点を本文の言葉を使って三十文字から四十字で説明しなさい。

問六 空欄 **D** に入る言葉として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

ア しかし イ もちろん ウ また エ そのため

問七 傍線部③「一体に」の意味として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

ア 表面的に イ 一つのものとして ウ 一般的に エ 本当に

問八 傍線部④「そのまわり」とは何のまわりですか。本文中から探し、抜き出して答えなさい。

問九 傍線部⑤「語彙の行く末」の説明として、最も適当なものはどれですか。次の中から選び記号で答えなさい。

ア モノが豊富になるにつれて、カタカナ語を中心に新しい言葉が次々に生まれ、語彙が増えてきたという変化。
イ 昔使っていた言葉を次々に使い捨てて、言葉の数が減っていき、語彙が少なくなってきたという変化。
ウ 私たちがずっと得てきた一つひとつの言葉の含みや味わいが乏しくなり、語彙が少なくなってきたという変化。
エ 目に見えるものを表す言葉も目に見えないものを表す言葉も減少して、語彙が少なくなってきたという変化。

問十 傍線部⑥「心のひろがりや陰影やゆたかさ、奥行き」とありますが、たとえば「本」の場合、これに当たるものは具体的に何ですか。本文中から探し、二十五字以内で抜き出して答えなさい。(句読点を含みます。)

